

学位論文内容の要旨

学位申請者	吉田 好美 【比較社会文化学専攻 平成21年度生】	要 旨
論文題目	勧誘に対する断りの研究 －日本語母語話者とマナド語母語話者の比較－	<p>本論文では、日本語母語話者（以下 JNS）とマナド語母語話者（以下 MNS）を対象として、母語場面で同等関係における断りの比較対照を通して、それぞれの断りの特徴を明らかにし、異文化間コミュニケーションへの示唆を得ることを目的とした。</p> <p>本論文は、断りに至るまでの言語行動に着目した研究Ⅰ、勧誘直後に見られる「第1の断り」について分析した研究Ⅱ、再勧誘が起こった際に見られる「第2の断り」以降の出現の有無および断りの様相を分析した研究Ⅲ、それぞれの断りの連鎖について分析した研究Ⅳ、断りの展開パターンについて述べた研究Ⅴの5つの研究で構成されている。断り発話の分析には、断り発話の構成を機能別に分類した「意味公式（Semantic Formula）」を使用した。意味公式には、不可などの「直接的断り」、言い訳、謝罪などの「間接的断り」、ためらいや驚きなどの「付随表現」があり、断り発話をそれぞれの意味公式に分類し、分析を行った。</p> <p>その結果、JNS は断りの表出までに、積極的な態度を表出したり、時間稼ぎをして回避したりしながら（研究Ⅰ）、「間接的断り」で手短かに断りを表現することが分かった（研究Ⅱ）。また、断りが表出されると、その断りがどのような内容であってもなるべく早く受諾される（研究Ⅲ）。断りが早く受諾されるため、第2の断り以降の出現はほとんどなく、断りの連鎖もあまりない（研究Ⅳ）。また、その断りがどのような内容であっても受諾されるため、会話の収束が早いことが示唆された（研究Ⅴ）。</p> <p>一方、MNS は、情報要求を多用することで、相手の働きかけに対して積極的に関わり（研究Ⅰ）、JNS よりも複数の機能を使用して具体的に断りを表現し、断りを伝達している（研究Ⅱ）。また断りが表出されてからは、再勧誘されながら複数回の断りを表出する（研究Ⅲ）。断りが複数回表出される場合には、「付随表現」と「間接的断り」の組み合わせを使用して、「付随表現」を減少させ、「間接的断り」を中核として断りを進め（研究Ⅳ）、最終的には、説得を用いるか意味公式使用数を増加させて、断りの意図を伝達し、会話を収束に向かわせることが示唆された（研究Ⅴ）。</p> <p>様々な観点から断りを包括的に捉え、円滑な異文化間コミュニケーションのためには、互いの違いを理解し、コミュニケーションを進めていく必要性について分析結果に基づいて丁寧に論述した。</p>
審査委員	(主査) 教授 佐々木 泰子	
	教授 高崎 みどり	
	教授 森山 新	
	教授 加賀美 常美代	
	教授 戸谷 陽子	